

総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント マッチ・ウェルフェアオフィサー報告書

(一財) 全日本大学サッカー連盟

本連盟では、2019年8月29日(水)～9月7日(土)に関西地域にて行われた『2019年度第43回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント』において、マッチ・ウェルフェアオフィサーとしての活動を行った。1週間余りに及ぶ活動を以下の通り報告する。

1. はじめに：ウェルフェアオフィサーとは

日本サッカー協会（JFA）は、暴力を用いた指導を「しない、させない、許さない」をキーワードに暴力根絶に向けて取り組んでいる。

「ウェルフェア」とは、幸福、快適な生活、福利を意味し、サッカーを楽しむサッカーファミリーの安心・安全を守る担当者が「ウェルフェアオフィサー」である。リスペクトの先進国であるイングランドサッカー協会では、このウェルフェアの守り人とも言うべき「ウェルフェアオフィサー」を各大会に設置し、フェアプレーのある試合環境づくりに努めている。

“大会として、安心・安全な環境をつくり、暴力根絶に取り組む”

“管理、監視、取締まり、処分をするのではなく、あくまでサッカーファミリーの一員としての気づきを伝える“

”大会を通じた啓発、情報発信“

などが、「ウェルフェアオフィサー」の主な役割である。

この、大会におけるウェルフェアオフィサーのことを「マッチ・ウェルフェアオフィサー」という。

全日本大学サッカー連盟ではこうした取り組みに対し、サッカーファミリーの一員として賛同するとともに、率先した実施を試みている。



2. 大学サッカー連盟での配置

大学生年代は社会的には「成人」となり、「社会的責任」が発生する年代である。1人の責任ある人間として、サッカーに関わらず様々な状況下においての判断を、それぞれでしなくてはならない。

JFAでのマッチ・ウェルフェアオフィサーの取り組みでは指導者が指導者に対してオフィサーとなっているのに対し、本連盟では“大学生は1人の責任のある人間である”という考えから、学生をオフィサーとして配置している。指導を受ける側の学生だからこそ感じられる「気づき」を、年長の指導者に伝えるということは、学生主体で「暴力根絶の問題に取り組む」という社会に対する意思表示、同じ学生に対する問題意識、改善意識の啓蒙につながる。

安心・安全な試合環境をつくるために、実際に指導を受ける“受け手=学生”に重点を置いて活動し、サッカーを取り巻く環境の“ウェルフェア”醸成に努め、よりサッカーを楽しめる環境になるよう活動していきたい。

3. 実施概要

1) 担当オフィサーの選出

全日本大学サッカー連盟所属の学生幹事8名を、今年度のマッチ・ウェルフェアオフィサーとして選出した。担当オフィサーは男性5名、女性3名とし、プレイヤー経験者からマネージャーとしてチームを支えてきた者まで多様な人材を選出した。

《マッチ・ウェルフェアオフィサー》

- ・町田 佳穂、丸山 雄大、麦屋 菜美(以上4年生3名)
- ・小野寺 啓悟、白崎 圭吾、ポアンポン 賢、竹井 涼夏(以上、2年生4名)
- ・大場 崇史(以上、1年生1名)

2) 実施大会

大会名：2019年度 第43回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント

対象試合：全23試合

※大会前、チーム代表者会議にて活動内容を伝達しチームへの協力を要請した。

3) オフィサーの業務内容

- ①試合前に両チームおよび審判団に活動意図の伝達。
- ②チーム会場入りからウォーミングアップ中もチームの様子を確認する。
- ③試合中、両チームベンチ横にて指導者・選手・審判員の言動を確認する。
- ④できる範囲にて観客席にいるチーム応援団の言動にも注意を図る。

- ⑤試合終了後、各チーム代表者に対して試合中に感じた「気づき」を伝え、それに対するチームからのフィードバックも受ける。

4) オフィサーが実施する上で考慮すべき点

- ・ 異議・遅延による警告に関するプレーは注視（アクチュアルプレーイングタイムが長くなるため）
- ・ 選手個人としての言動だけでなく、チーム全体の言動やそれが周囲に与える影響を考える。（応援やベンチメンバーも）
- ・ 今大会はチームとの対話をより大切にし、チームの意見を引き出すことを意識する。
- ・ ネガティブな面だけでなく、ポジティブな面も発見しフィードバックする。

4. 実施報告（各試合報告書より抜粋）

《気になった点》

- ・ 失点後から審判に対する抗議が増えたように感じた。
- ・ 判定に対しての抗議、ファウルに対するカードの要求が多い印象。
- ・ 手を使うシーンやファウルで止めるシーンが目立った
- ・ スタッフはファーストリアクションがかなりオーバーに感じる部分があった。
- ・ 審判や選手をわざとあおっているのではないかと感じる場面があった。
- ・ 味方選手への声かけも含め、「～だろ」など口調が強い。受け取る側からすると怒鳴られているように感じた。

《良かった点》

- ・ チームメイトが判定に対して不服な態度を見せた時は落ち着くようになだめ、自らがファウルを犯した時は謝る態度を見せていた。（1回戦：中京大学）
- ・ 選手たちの自主性に委ねており、学生スポーツらしさを垣間見ることができた。（1回戦：大阪経済大学）
- ・ 相手へのリスペクトも忘れずに試合終了まで声を出してチームを盛り上げていた。（1回戦：高知大学）
- ・ 倒れてもファウルをアピールすることなく、笛が鳴るまで、プレーを止めずにできていた点が良かったと思う。また、ベンチから「切り替える」という声掛けが多くされていた。（1回戦：静岡産業大学）
- ・ 失点後に監督、控え選手から「切り替えよう」という声が出てきた。
- ・ 他のスタッフが声を荒げる場面で、監督はチームに声をかける場面があり好感を持った。
- ・ （2回戦：大阪体育大学）

- ・ 良いプレーには拍手を送り、ミスにはポジティブな声掛けを送っていた。(2回戦：筑波大学)
- ・ PKを外してしまった選手に、味方の選手のみならず対戦相手の選手が手を差し伸べ背中をさする場面には選手同士のリスペクトの気持ちが表れていた。(1回戦：福岡大学)
- ・ ピッチのプレーが熱くなった時「ノーファウル」と頻繁に声をかけクリーンな試合を心がけていた。(2回戦：関西大学)
- ・ ファウルになり審判に何か言いたいような場面もあったがグッとこらえていたのが印象的であった。(2回戦：駒澤大学)
- ・ 選手が審判へファウルをアピールした際にベンチから注意できていたのが良かったと思う。(2回戦：法政大学)
- ・ 相手の選手が審判にアピールをしているのに対して、「こっちは自分たちのプレーをしよう」と声掛けをしていて、良い心がけだと思った。(2回戦：静岡産業大学)
- ・ 思うようにできない展開だったが、いらだちを見せることなく、競り合いのあとに相手が倒れた際には手を差し伸べるなど相手へのリスペクトを感じる振る舞いが多々見られた。(準決勝：大阪体育大学)

《チームからの意見》

- ・ 審判団の判定に一貫性が見えなくなってきたからはアフターが連鎖してしまってきていたので、つい言うてしまうことがあったが、抗議ではなく会話として審判団とももっとコミュニケーションをとるべきだった。
- ・ 審判に対しての意見は、スタッフ全員が言う必要はないと思っているので自分は言わないようにしている。
- ・ 学生が運営とはまた違った立場で試合をみて目上の人と会話をするという行為にリスペクトを感じている。
- ・ サッカーはコミュニケーションの競技で、相手の方がその点において上だと感じた。
- ・ 雷による試合時間の遅延の件について、運営側の対応が悪く、はっきりとしない伝え方だったため、チームはどう動けば良いかわからなかった。
- ・ フェアプレーはいつも念頭に置いてプレーをするように声をかけている。
- ・ 勝負がかかっているし、リアクションをとってしまうことはしょうがないと思う。相手にも審判にもリスペクトを持ち戦えば理解してくれると思っている。

5. 総括（マッチ・ウェルフェアオフィサーより）

今大会にて、総理大臣杯ではマッチ・ウェルフェアオフィサーの導入は4年目となった。1年目に関しては一部試合での試験的導入もあったため、全試合導入は3年目となる。継続的な活動の甲斐もあり、徐々に出場大学からの理解を得ることができるようになったのではないかと感じる。本連盟のONE GOAL ONE COINの活動報告からもわかるように、警告・退場数は減少している。

今大会の各オフィサーの報告書では、チームとしてフェアプレーを心掛けたアクションがあったとの記述が多かった。勝負がかかった中でつい熱くなってしまうリアクションをとってしまうことはやむを得ない場面もあるだろう。しかしその場面で、審判の判定に対し執拗に抗議し続ける、何度も同じことを繰り返すなどはいい印象を受けないが、すぐに切り替え相手を気遣う姿勢や、ポジティブな声掛けをする姿勢が多くむしろ好感が持てると感じた。

今大会では、特に監督が率先してそういった切り替えを促していた印象を持った。

また今年度に関しては、チームとの意思の疎通に重点を置き、一方的なオフィサー側からの「押し付け」にならないことを意図して活動を行った。事前にチームに伝達していたこともあり、各試合の報告書にチームからのフィードバックや意見が多く見られた。同じサッカーファミリーであるからこそお互いの意見をぶつけ合うことで、皆が気持ちの良い大会を目指すことができるはずである。

またマッチ・ウェルフェアオフィサーの活動そのものに対して助言をいただける機会もあり、この活動を通してオフィサーもまた学ぶことが多かったのではないかと考える。

全国大会では浸透しつつあるこのリスペクトへの意識は、各地域の大会やチームにも広まっていくべきであるが、その広がり是一部にとどまっている。今回の活動報告を各地域や出場チームへ展開したり、活動を実施する大会の数を増やしたりするなど周知活動を行うことで、より多くの連盟に関わる人たちへ本活動の認識を持っていただくとともに、本連盟としても今後この活動や考えに賛同していただけるように取り組んでいきたい。



6. 統括（ウェルフェアオフィサージェネラルより）

サッカーに関わるすべての人が安全にサッカーを楽しむことができる環境を作り出すこと、これがウェルフェアオフィサー設置の目的であり、あくまでもこのマッチ・ウェルフェアオフィサーは、そのための1つのツールである。

JFAのウェルフェアオフィサー研修会を受けながら、マッチ・ウェルフェアオフィサーをすることそのものが目的になっているようにも感じた。昨年アメフトのタックル問題が社会問題になったにも関わらず未だ暴力・暴言・ハラスメントがなくならないのが現状である。サッカーに関わるすべての人が安全にサッカーを楽しむことができる環境を作り出すために、それぞれが何かしらのアクションを起こすべきだと思う。この報告書を読んだ方々が少しでも何かを感じてサッカーを楽しむことができる環境作りのためにアクションを起こしてもらえたらと思う。

参照)

ウェルフェアオフィサー研修会 ～サッカーの活動における暴力根絶に向けて Vol.77～

<https://www.jfa.jp/respect/tnews/news/00020897/>

～暴力根絶に向けて～ いつも心にリスペクト Vol.10～

https://www.jfa.jp/football_family/respectfc_japan/heart/news/00009754/

2017年度 ウェルフェアオフィサー実施報告書

https://www.jufa.jp/data/pdf/p_1528359586.pdf

ONE GOAL ONE COIN 2018年実施報告

https://www.jufa.jp/data/pdf/p_1555684157.pdf